

先生と親のための LGBT ガイド

もしあなたがカミングアウトされたなら

遠藤まめた 著 (合同出版 2016年7月発行)

フォーラム会員 : Tommy Harley

「あたりまえ」という残酷

人口の5~8%ほどの割合で存在すると言われる LGBT (※1)。権利の平等を求める世界的な気運の高まりもあって日本でもその存在の認知が広まってきていますが、異性愛者かつ性別違和のない人が「あたりまえ」とされ圧倒的多数を占めるこの社会では、LGBTは「いない」ものとされたり否定的な目で見られたりしています。世間の偏った性別観や無理解による差別・憎悪が当事者の自尊心を蝕み、鬱、貧困、依存症、自死念慮などの困難に陥らせているという現実があります。

あなたの周りや身内にもいるかもしれない当事者を排除や孤立から守るには、セクシュアリティは多様で一人ひとり違っていいのだという認識を多くの人々が共有し、社会的な不利益をなくす法整備を進める必要があります。特に教育現場にいる大人たちが「多様な性」の正確な知識を身につけ、これからの社会を生きる子どもたちに適切に教えることが必要とされています。

一校に一冊！一家に一冊！

この本は、10年以上前から LGBT の子どもたちの問題に取り組んでいるトランスジェンダー (※2) の著者が、親や教職員など子どもと接する機会の多い大人たちに知っておいてほしい LGBT の知識をわかりやすくまとめた入門書です。各用語の説明はもちろん、当事者の子どもたちのリアルな声を取り上げながら、よくある疑問・誤解に対し Q&A 方式で丁寧に解説しています。「LGBT の子どもたちはどんなことに困っているのだろうか?」、「相談を受けた時どう対応したらいい?」な

どといった人たちの手引きとして最適だと思います。

学校や家庭を当事者の子どもたちが安心して過ごせる場所にするために、多くの人にぜひ読んでもらいたい一冊です。

自分はいったい何者？

私自身もトランスジェンダーに生まれ、かつてはこの本に出てくるような子どもの一人でした。男の子と遊ぶのが自然で女の子向きの服装やおもちゃを嫌がったり、女の子に恋をして罪悪感を覚えたり、一人称を使えないことや自分の声を気にすることで他愛ない会話すら苦痛になったり、大人の女性へと変化する体が嫌でたまらなかつたり…etc.

何かと人を男女別に分け「らしさ」(性別役割)を求める周囲、自分がその「女子」と一緒にされることに腑に落ちない思いが募りました。学校でも家でも生活のあらゆる場面につきまとう「性別」に葛藤し、ひたすら疲弊する日々だった気がします。自分は何か人と違う、おかしいと感じ始め、幼心に「大人になっても普通の人生は送れないんだろうな」というような予感もありました。

私が子どもだった30年以上前はインターネットもなく、LGBTに関する情報は「ホモ」や「オカマ」と嗤われ蔑視される(私も嗤っていた)対象としてのことばかりで、肯定的なものや「心と体の性別が一致しない」という概念を得るなんて難しい時代でした。「性同一性障害」なる言葉に出会ったのは20代も半ばになった頃、国内初の性別適合手術が行



われた時のことです。TV ニュースの解説を聞いて「ああ、自分はこれだ…」と、驚くのと同時に体中の力が抜けていく感覚になったのを覚えています。問題が解決したわけではないけれど、生きづらさの正体がわかった、自分以外にも同じ人がいた、体を変えることができるんだ、と知り得ただけでも少し楽になれた気がしました。

教育が変われば社会が変わる

(予感したように) 社会と折り合いをつけられないまま私はすでに「先生と親」と同じ世代になってしまいました。もしも子どもの頃にこんなことを知っている大人が周囲にいたら…こんな対応や支えを得られていたら…と思うことがこの本に書かれています。「多様な性」の基礎知識から当事者の困りごと、日常で実行できる具体的なサポートの提案や法律関係のことまでを詳しく知ることができます。巻末には授業でも使えるさまざまな資料(書籍、映画、ウェブサイト、パンフレットなど)、支援団体、相談機関も数多く紹介されています。セクシュアリティのことは本人が打ち明けない限り周囲は気づきにくく、また、誰がLGBTに理解があるのかも当事者にはわからないものです。直接的なサポートが難しい場合、例えば、校内の壁に多様な性を啓発するポスターを一枚貼るだけでも、保健室や図書室にLGBT関連の本を一冊置くだけでも、当事者の子どもにとってはとても心強く映ることと思います。日常のコミュニケーションの中でさりげなくLGBTに寛容的な言動をとる大人がいることも安心につながります。

“ふつう”って何??

LGBTでない人たちにもちゃんと名前があります。異性だけを好きになるなら「異性愛者(ヘテロセクシュアル)」であり、心と体の性が一致していれば「シスジェンダー」と言い、「多様な性」はマイノリティとマジョリティの両方で構成されています。マジョリティの

中もいろいろで、多様性の問題はマイノリティ側だけの他人事ではなく、共にこの社会を生きるすべての人の「自分事」なのです。LGBTをきっかけに、これまで当然視していた異性愛社会や自身のセクシュアリティについて改めて考えることで、「あたりまえ」に生きられずにいる人の存在に気づくことができると思います。LGBTについて知ることは、当事者の自己肯定感や命を守るだけでなく、そうでない人にとっても、無知や無関心からの何気ない言動で無自覚に誰かを傷つけてしまう悲劇を防ぐことができます。存在や実態を知るだけでも意識が変わり、社会も寛容になっていくのではないかと思います。

世界に虹色の光あれ

不安に押しつぶされそうな思いで毎日を過ごすかつての私のような子どもも、LGBTではないけれど何らかのマイノリティで抑圧されている人も、誰にどんな違いがあっても一人ひとりが個人として尊重され安心して「自分」を生きられる、そんな世界であってほしい。それを可能にする力はみんなが持っていて、特に子どもの教育に関わる人たちに大きくかかっています。

最後に、この本の中から、息子からゲイであることを打ち明けられたある母親の言葉を紹介します。(LGBTを勉強し相談先を捜す中で)「こんなに大切なことを、どうして私は教わらなかったんだろうー」、「誰も何も知らないなんて、こんな愚かなことはないと思いました。」

※1…レズビアン(L)、ゲイ(G)、バイセクシュアル(B)、トランスジェンダー(T)などの性的少数者、セクシュアルマイノリティの総称

※2…自認する性と生物学上の性が一致しない(性別違和がある)人。性同一性障害を含む

※今回紹介した本は、当フォーラムの書棚にも一冊所蔵されています。会員の方であれば貸出が可能ですので、お気軽にご利用ください。